

石川県立美術館開館35周年・日本伝統漆芸展第35回記念

特別展 URUSHI 伝統と革新



松田権六 《鷺蒔絵棚》広島県立美術館蔵
「URUSHI 伝統と革新」より

- 特別陳列 漆皮 ―近代の文化財修復と伝承― 【工芸】
- 特別陳列 加賀藩の美術工芸Ⅰ 【前田育徳会尊經閣文庫分館】
- 漆の美【古美術】
- 鴨居 玲 教会【近現代絵画】
- 秋の優品選【近現代絵画・彫刻】

- 9月の企画展示室
- 9月の行事予定・百万石の文化講座
- 文化財現地見学参加者募集
- 特陳Topics「漆皮」



新村撰吉 《漆皮花蝶文盤》
「漆皮」より

URUSHI 伝統と革新

9月15日(土)～10月14日(日) 会期中無休 前期：9月15日～30日 後期：10月1日～14日

日本工芸会漆芸部会の展覧会として、漆芸作家たちの登竜門となっている日本伝統漆芸展が、本年度で三十五回を迎えました。平成三十年の秋季企画展「URUSHI 伝統と革新」は、これを記念して開催される展覧会です。本展は漆芸部会の歴史をたどると同時に、明治時代以降、現代までの漆芸作家たちの歩みを紹介するものであり、「近代の名匠」「重要無形文化財制度と日本工芸会」「日本伝統漆芸展へ」「現在をつくる作家たち」の四章で構成されます。江戸時代末期から戦前に活躍した近代の名匠から、歴代の重要無形文化財保持者を含む、主要な作家たちと、現在活躍している若手作家まで、計一三七点九十三作家の作品が一堂に紹介します。

一作家につき一～二点の作品を展示しますが、石川県出身の不世出の名匠であり、日本工芸会の設立にも尽力した松田権六の作品は、東京美術学校の卒業制作作品をはじめ十一一点展示します(《赤とんぼ蒔絵箱》は前期のみ)。

本展は石川県立美術館・そごう美術館・MOA美術館の三館に巡回しますが、展示作品数が最も多く、松田の代表作である《蓬萊之棚》と《鷲蒔絵棚》(広島県立美術館蔵)の二点を同時にご覧いただけるのは当館のみです。この二点が介するは平成十九年に当館と東京国立近代美術館工芸館、MOA美術館で開催された「松田権六展」以来となります。

松田をはじめ、本展で紹介する作家たちの存在があつてこそ、伝統的な技術が受け継がれ、優れた作品が生まれたと言えるでしょう。個々の作品の魅力を味わうのみならず、漆という素材の持つ多様性、未来への展望を感じ取っていただければ幸いです。

◆記念講演会

「近代漆芸のあゆみ」

講師：白石和己氏(工芸評論家、本展監修)

日時：九月三十日(日)

午後一時三十分～三時

会場：当館ホール(先着二〇〇名)、聴講無料

◆いしかわの工芸文化魅力発信・向上プログラム

「いしかわの工芸の巨匠に聞く」

出演：前 史雄氏(重要無形文化財「沈金」保持者)

小森邦衛氏(重要無形文化財「髹漆」保持者)

秋本和美氏(フリーアナウンサー)

日時：九月二十四日(月・振) 午後一時三十分～

会場：当館ホール(定員二〇〇名)、聴講無料

申込：県文化振興課 〇七六―二三五―二三七―

◆観覧料

	個人	一般	大学生
個人	一、〇〇〇円	八〇〇円	
団体 (二十名以上)	八〇〇円	六〇〇円	

※県立美術館友の会会員は団体料金。



機井如真 《苜罌丸盆》東京国立近代美術館蔵



松田権六 《赤とんぼ蒔絵箱》(前期のみ) 京都国立近代美術館蔵

第2展示室

漆の美

9月1日(土)～10月14日(日) 会期中無休

今回の特集は、企画展「URUSHI 伝統と革新」に関連して、館藏品、寄託品のなかから中国と日本の漆芸の優品を展示します。宋から明の時代に中国の漆芸は大きな展開をむかえます。そして同じ時期、日本では鎌倉時代から室町時代にかけて禅宗の興隆にともなって中国の文物への関心が高まり、「唐物」を第一とした美の規範が形成されていきます。

しかしそれは、あくまでも日本の美意識によつて選別された唐物であったことを忘れてはなりません。そこで今回は、加賀の古刹大乗寺に伝えられ、使用された屈輪や堆朱などの彫漆作品、また小堀遠州の目利きによつて加賀藩主・前田家が入手した螺鈿の盆などから、日本において中国の漆芸がどのように賞翫されたかの一端をご紹介します。

さらには五十嵐家と本阿弥家、そして宗達、宗雪を輩出した俵屋の様々なつながりの延長から、県文《蒔絵螺鈿白楽天図硯箱》など尾形光琳の意匠に基づく作品も合わせて展示します。琳派の活動を考えると、近代的な美術や工芸の概念では捉えきれない、日本の造形の本質を改めて認識することができます。



県文《蒔絵螺鈿白楽天図硯箱》伝清水九兵衛作

第7・8・9展示室

主催：石川県立美術館・公益社団法人日本工芸会
NHK金沢放送局・NHKプラネット中部
特別協力：東京国立近代美術館

学芸員の眼

先頃、石川県の漆芸作家・山岸一男さんが重要無形文化財「沈金」保持者の認定を答申されました。いわゆる人間国宝です。これで石川県ゆかり(県出身・在住)の人間国宝は、現存作家九名を含む二十三名となります。二十三名の内訳は、陶芸二名、染織三名、金工三名、刀剣一名、木工三名、諸工芸(截金)一名、そして漆芸が最も多く十名です。漆芸の人間国宝は物故者も含めて合計二十二名ですので、石川県は多くの優れた漆芸作家を輩出していることが、数字からもご理解いただけるかと思えます。本展では歴代の人間国宝二十二名、すべての作品をご覧いただくことができます。

今回の特集は、企画展「URUSHI 伝統

そして日本の漆芸では、まず加賀蒔絵のルー

と革新」に関連して、館藏品、寄託品のなかから中国と日本の漆芸の優品を展示します。宋から明の時代に中国の漆芸は大きな展開をむかえます。そして同じ時期、日本では鎌倉時代から室町時代にかけて禅宗の興隆にともなって中国の文物への関心が高まり、「唐物」を第一とした美の規範が形成されていきます。

ツから江戸時代の展開を、五十嵐派と清水九兵衛の作風を意識しながら概観します。加賀蒔絵の特徴のひとつに、精緻な絵画的表現を挙げることができます。今回展示される作品群から、時代が異なる作家たちが、この特徴を底流として独自の創意を模索していたことを知ることができます。



山岸一男 《沈黒緑陰箱「能登有情」》

第5展示室

しっぴ 漆皮 —近代の文化財修復と伝承—

9月1日(土)～10月14日(日) 会期中無休

学芸員の眼

石川県の近代漆芸史において特筆すべきは、やはり松田権六の影響力でしょう。金沢出身の松田は石川県立工業高校を卒業後、東京美術学校に進学します。大学では、全国の文化財を調査した六角紫水に師事し、自らの教え子にも古い技法の研究を勧めました。新村撰吉もそのひとりでした。新村は、大阪の四天王寺が空襲の被害を受けたあと、新しく経巻を納めるための漆皮箱を制作・奉納しました。箱は一つずつ桐の抽斗に入れられ、ゆがみもひび割れもほとんどないままに伝えられています。今回は、四天王寺で撮影した作品写真をパネルで紹介するとともに、同じ技法で制作された漆皮箱を展示します。



新村撰吉 《漆皮時絵箱》

漆皮とは読んで字のごとく、動物の皮革を素地とした漆器のことです。東大寺正倉院や大阪の四天王寺には、奈良時代の例がのこり、この頃隆盛した技法とされています。漆皮作品に触れてみると、軽く、手ざわりに革独特のなじみを感じられます。また組物や指物のようなきつちりした角を持たず、柔らかくカーブを帯びた形となることも特徴です。どことなく漂う大らかな雰囲気も、こうした性質によるものでしょうか。一方、年月が経つと皮革がねじれ、小さな蜘蛛手状のひび割れを生じやすくなります。さらに皮革の処理には時間的にも費用的にも、大きな負担がかかります。そのため平安時代になると、現在広く用いられている木の素地に取って代わられていきます。

ところが明治期に入り、古い文化財の修復や模造が始まると、当時の技法に再び注目が集まります。その中で漆皮に注目したのが金沢出身の新村撰吉(一九〇七～一九八三)です。新村は木型に革をあてて打ち延ばし、強い力で締め上げて成型することで、漆皮の技法をよみがえらせました。日本伝統工芸展にいくつもの漆皮作品を出品していますが、モダンなデザインが新鮮な印象を与えます。さらにその後、輪島・金沢で活躍した坂下直大は独自に研究を重ね、ねじれを生じにくい漆皮の制作に取り組みました。本展示では新村、坂下に加え、現在も活躍を続ける増村紀一郎の作品を展示します。三者三様の漆皮作品をどうぞじっくりご覧ください。



増村紀一郎 《漆皮朱塗提盤》 石川県輪島漆芸美術館蔵

鴨居 玲 教会

9月1日(土)～10月14日(日) 会期中無休

鴨居玲がタブローとして最初に教会を描くのは、昭和四十四年のことで、以後、六十年(一九八五)に不慮の死を遂げるまで、人間の「生き様」をテーマに人物、裸婦、自画像と同時に、教会をモチーフに一連の作品群を繰り返し描くのでした。

はじめ、教会は地上に建ち、写実的ではあるものの、入り口の扉も窓もなく、人を受け入れることを拒んでいるかのようでした。やがて外界との交渉を拒否したような非現実の教会となり、傾き、そして飛び立ち、宙に浮かぶこととなります。さらに、大地に激突したり、波にのみ込まれるというバリエーションもありました。

当館の「教会」は、鴨居自身から当館に寄附いた

いた作品で、小品の多い教会シリーズでは一〇〇号大という最大級のもので、昭和五十三年の二紀会第三十一回展に出品されました。重いグリーンに十字架を形どった教会の影が映されるというシュールな世界が描かれています。

作者は六十年に自らの命を絶つこととなりますが、二十年近い「教会シリーズ」は、画家鴨居玲が「神」を通して、生きることの意味を探し求めた心の軌跡、と見ることで出来るのではないのでしょうか。そういった意味で「教会」は、鴨居玲のもう一つの自画像といえるかも知れません。



鴨居玲 《教会》

加賀藩の美術工芸 I

9月1日(土)～10月14日(日) 会期中無休

今回の特別陳列では、国宝《十五番歌合》伝藤原公任筆を全巻展示します。本作は、紀貫之・凡河内躬恒から柿本人麻呂・山部赤人まで歌仙三十人の秀歌を一首ずつ選び、左右に番えた歌合です。撰者は平安時代中期の公卿・歌人である藤原公任(九六六～一〇四二)とされ、成立時期は寛弘五年(一〇〇八)から翌六年にかけてと推定されています。公任はこれに次いでもう一つ「十五番歌合」を撰じたため、前者を「前十五番歌合」、後者を「後十五番歌合」という場合もあります。

もとは十五番三十首の完本でしたが、その後古筆収集の流行に伴い切断され、現在はその断簡が十五首分確認されています。そのうちの七番紀友則・藤原清正、八番小野小町、九番坂上是則・藤原元真、十番

藤原仲文・菅原輔昭、十一番斎宮女御の八首分をもとに、他の二十二首を江戸時代前期の公卿で書家・古筆家でもあった中院通村(一五八八～一六五三)が蠟摺や雲母摺文様の做製唐紙を用いて補写し、一巻に仕立てたのが本作です。

さらに今回は、企画展「URUSHI 伝統と革新」に関連して、重文《扇面散詩絵手箱》も展示します。本作は室町時代十六世紀の優品で、昭和十二年(一九三七)に前田家十六代の利為が、金沢出身で漆芸界の第一人者となった松田権六に修復を依頼している点でも注目されます。今回は、松田による修復図面などもあわせて展示しますので、制作活動のみならず、文化財の修復にも尽力した「漆聖」の重要な側面を再認識していただきたいと思えます。

国宝《十五番歌合》伝藤原公任筆(部分)

9月の企画展示室(第7・8・9展示室)

第40回

伝統加賀友禅工芸展

9月6日(木)～10日(月) 会期中無休

第4・6展示室

秋の優品選

9月1日(土)～10月14日(日) 会期中無休

近現代絵画・彫刻の「秋の優品選」の各分野の作品を紹介いたします。

洋画では、鴨居玲の特集にちなみ、鴨居の師宮本三郎の《裸女達に捧ぐ》と《熱叢夢》をご覧いただきます。前者は裸婦が二人横たわり、その周りを花や楽器がとりまいています。モデルを務めてくれる裸婦に感謝の音楽と花々を捧げたのです。後者はギリシャ神話の「レダと白鳥」のテーマを翻案したものです。

日本画は「月」をテーマに紹介します。我々東アジアの住人に秋の観月は格別なもの。また「行く末は空もひとつの武蔵野に草の原よりいづる月影」と詠まれたように、月と武蔵野も情趣深く、古くから好まれた画題です。稲元実《武蔵野》は、満月に薄や秋草を配した現代の武蔵野図です。

加賀友禅技術保存会は、現在十名の友禅作家が会員に認定されており、加賀友禅の正統な技術保存と後継者育成のため、石川県の無形文化財の指定を受けています。その主旨を推進するため、毎年開催しているのがこの展覧会です。

第三十二回展より公募制を採用したことで、広く一般の方々も出品出来るようになりました。加賀友禅における新しい感性と創造的作品の数々に加えて今回、四十回を記念して第七展示室に当会の歴史受賞者や保存会会員先駆者の方々の石川県立美術館所蔵品を中心に四十二作品もご覧いただきます。

※毎日十三時三十分より作品解説があります。

彫刻では、乾漆作品を中心に紹介します。中島東洋《婦人像》は、色漆がエキゾチックな雰囲気を出しています。また、堀義雄は、赤・青などの彩漆を用い、生命の源泉をテーマとした乾漆彫刻を得意としています。今回は《転生》や《悲愁の曼荼羅》などを展示します。その他、大小様々な彫刻をお楽しみください。

素描 版画では、展示替え毎に脇田和の作品をお楽しみいただいておりますが、今回は十五歳にドイツに渡り、ベルリン国立美術学校在学中に学んだ人物デッサンをご覧いただけます。デフォルメを伴っていても、安定を感じさせる脇田作品。その魅力が、緻密に観察し描写する厳格なデッサン力からきていることを感じていただけることでしょう。

◇入場料 四〇〇円(三〇〇円)高校生以下無料

※()内は二十名以上の団体料金

◇主催 加賀友禅技術保存会

◇連絡先 金沢市小將町八一八 加賀友禅会館内 伝統加賀友禅工芸展事務局

電話 〇七六一二二四一五五一

お詫びと訂正

前号の美術館だよりに誤記がありましたので、お詫びして訂正いたします。
2 ページの広重展の観覧料は、

正しくは高大生七〇〇(五〇〇)円、小中生四〇〇(二〇〇)円です。



稲元実 《武蔵野》

第49回 文化財現地見学 参加者募集

期 日：十月二十日(土)～二十一日(日)

参加料金：友の会会員 二三、〇〇〇円 会員以外 二四、〇〇〇円

応募締切：九月十四日(金)必着

日程／出発 十月二十日 午前七時 帰着 十月二十一日 午後七時頃

発着／金沢駅 金沢駅西口団体バス乗り場

※移動はすべて貸切バスを使用します。

※宿泊はお一人様一室(シングル)となります。

◆見学地

【洲原神社】

正式祈禱の後、岐阜県重要文化財に指定されている本殿を含め、宮司のご説明を聞きながら拝観します。

【清泰寺】

京風の寺院建築様式と金森宗和作の庭園を、住職のご説明を聞きながら拝観します。

【荒川豊蔵資料館】

志野・瀬戸黒で国の重要無形文化財保持者に認定された故・荒川豊蔵の、自身の作品や工房などを解説を聞きながら見学します。

【可児市郷土歴史館】

「可児の地質時代から現代まで」をテーマに、可児市の文化財について解説を聞きながら見学します。また、桃山陶の優品も鑑賞します。

【元屋敷陶器窯跡】

国指定史跡で美濃地域最古の連房式登窯の遺構を見学します。

【多治見市美濃焼ミュージアム】

美濃焼誕生から現代の美濃焼まで、わかりやすく解説をいただきながら、作品や陶片を含めて鑑賞します。

【岐阜県博物館】

展覧会「信長・秀吉・家康と美濃池田家―大御乳・池田恒興・輝政の戦い―」を、自由に鑑賞します。

◆申込方法

往復はがきに「文化財見学希望」と明記し、氏名・年齢・性別・郵便番号・住所・電話番号・会員番号を記載のうえ、ご応募ください。定員四十二名、応募者多数の場合、抽選となります。

◆あて先

〒九二〇一〇九六三 金沢市出羽町二一ー一

石川県立美術館「文化財現地見学」係

※行程に徒歩移動や坂道、階段が多く含まれます。脚に不安のある方はご注意ください。

百万石の文化講座

本年度も、前田育徳会尊經閣文庫分館の魅力発信事業の一環として「百万石の文化講座」を開催します。今回は、加賀藩五代藩主・前田綱紀に深く共感し、財団の設立など新しい時代にふさわしい形で文武二道を基盤とした加賀藩主・前田家の文化政策を継承した、前田家十六代・前田利為の事績にスポットを当て、公益財団法人 前田育徳会の原点を再認識したいと思えます。

日時：十月七日(日) 午後一時三十分～午後三時

講師：菊池浩幸氏(公財 前田育徳会主幹)

演題：前田利為侯と美術工芸

会場：当館ホール(聴講無料・先着順)

9月の行事予定

■土曜講座		午後1時30分～	美術館講義室	聴講無料
8日(土)	鴨居と教会			二木伸一郎
15日(土)	文化財を護る―文化財保護法と国宝―			谷口 出
22日(土)	近代の文化財修復―漆皮を中心に―			有賀 茜
29日(土)	日本工芸会 漆芸部会の作家たち			寺川和子

《漆皮盛器「華揺」》しっぴもりき かよう

金沢美術工芸大学寄託

縦30.0cm 横30.0cm 高8.5cm 平成25年(2013)第60回日本伝統工芸展

坂下直大 さかした・なおだい

昭和12年～平成27年(1937-2015)



坂下直大(一九三七〜二〇一五)は岐阜県に生まれ、輪島での生活を経て、金沢で活躍した作家です。二代呉藤友乘(一九〇五〜二〇〇二)に師事しました。坂下が漆皮作品を手がけるようになったのは、「自分と違うことをしなさい」という師匠の言葉がきっかけだったといいます。その言葉を胸に、正倉院展に通って漆皮の技法を追究、改良していくのです。

漆皮に用いられる皮革は大体が鹿、牛と言われています。坂下は自ら皮の処理を行い、生皮から肉を削ぎ、毛を抜いて乾かすという工程に一週間以上かかったといいます。その皮を一度水に浸してやわらかくし、木型に当てて木槌で打ち延ばしながら器形を作ります。漆皮作品の弱点は、皮革がゆがんで「くるい」を生じやすいことです。坂下はこの問題を克服することに心を砕き、竹ひごや曲輪と組み合わせて強度を高めました。技法に制限されない器形を生み出しました。本作品は、漆皮の盤を木製の脚で支え、まるで盤が捧げ持たれているかのようにも見えます。坂下は平成二十七年に亡くなるまで多くの漆皮作品を手がけ、工程見本なども制作しました。工程とあわせ、漆皮作品の本来持つ優美さ、そして新たな魅力をお楽しみください。

次回の展覧会

平成30年10月18日(木)
～11月19日(月)

前田育徳会 尊経閣文庫分館		第2展示室	
加賀藩の美術工芸Ⅱ		石川の文化財	
第3・4展示室	第5展示室	第6展示室	1F企画展示室
秋の優品選	画家とやきもの	秋の優品選	第65回 日本伝統工芸展 10月26日(金) ～11月4日(日)

ご利用案内

コレクション展観覧料

一般 360円(290円)
大学生 290円(230円)
高校生以下 無料
※()内は団体料金
毎月第1月曜日はコレクション
展示室無料の日(9月は3日)

今月の開館時間

午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00～午後7:00 年中無休

9月は無休で閉館しています

「石川県立美術館だより」に広告を掲載しませんか?

石川県立美術館友の会会員、石川県立美術館協力者、
県内各行政機関及び文化施設、全国の美術館・博物館へ

郵送配布!! 3,000部発行

ターゲットを狙った
知名度向上

県立美術館発行の
信頼度の高い広報媒体

お問い合わせ ☎092-716-1401

株式会社ホープ 福岡県福岡市中央区薬院1-14-5MG薬院ビル7F
東京証券取引所マザーズ上場 福岡証券取引所Q-Board上場 財源確保 検索

石川県立美術館だより
第419号(毎月発行)
2018年9月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel: 076(231)7580
Fax: 076(224)9550
URL: <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>